

有坂秀世『音韻論』—故濱田敦氏旧蔵本紹介

吉池孝一

一

『有坂秀世 言語学国語学 著述拾遺』(有坂愛彦・慶谷壽信編、三省堂、平成元年六月)の金田一春彦氏序文の末尾に次のようにある。

「有坂博士の学説の中心である博士の音韻論は、今思うと、あまり多くの人に理解されなかった。大きな影響を受けたのは、私以外では、私と同じ年代の平山輝夫氏・浜田敦氏、英語学の五十嵐新次郎氏、ぐっと若くなるが、鈴木真喜男氏ぐらいではなかろうか。この本の力で、博士の学説に共鳴する人が多く出ることを私は期待してやまない。」

ここに名の挙がった国語学者故濱田敦氏の旧蔵本『音韻論』を古代文字資料館が所蔵しているので紹介する。

二

『音韻論』の初版本は昭和15年12月15日に三省堂より上梓され、その後版を重ねた¹。ここに紹介する故濱田敦氏旧蔵本は昭和15年の初版本である。後扉の前頁に縦書きで「昭和十六年一月二日 濱田 敦」と署名がある。本文中には朱筆で濱田氏のものと思われる書き込みや、アンダーライン、「?」などのしるしが随所に付されている。その筆跡は薄く、消えかかった部分も多いため判読は容易ではない。書き込みの状態をみる限り新しいものとは思われないが、その時期については不明とするしかない。少なくとも『音韻論』のどの部分を問題にしていたかということとはよくわかる。また誤記誤植の訂正もある。

いま参考までに本文冒頭の頁(3頁)を開いてみると次のようにある。まず、上部欄外の朱筆の書き込みが目にとまる。

音節と音韻との関係(日本語に於ける)

日本語で音韻〔k〕などと言ひ得るか

これは、想像するに、実際の発音の単位として子音のみを取り出すことが出来ない日本語にあって、子音〔k〕を音韻観念として取り出すことは可能であるかという疑問、或いは〔k〕を音韻観念として取り出し音声として実現することは可能で

¹ 諸版本の状況については吉池孝一2007を参照。

あるかという疑問を記したものであろう。有坂音韻論の根幹に係わる問題である。

次に、同頁本文の「抑、音韻體系(Phonologische System)は、一定の言語に固有の音韻論的諸對立(Phonologische Gegensätze)の總體である。」(8-9行)を見ると、ドイツ語「Phonologische System」の Phonologische に、朱筆で s を付し Phonologisches としている。これは形容詞の語尾変化を正したものである。

三

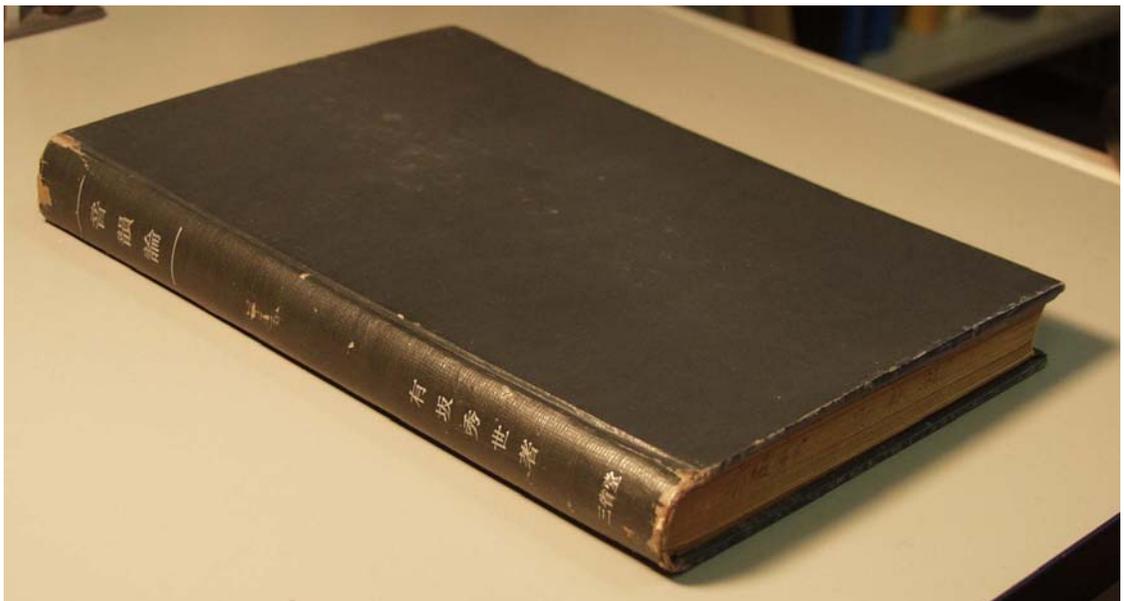
『音韻論』が発刊された当時、及びそれ以後現在にいたるまで、それがどのように受けとめられたかということについては、公刊された記述によって検討するのが筋である。しかしながら、このような書き込みであっても、学史においてなんらかの意味をもつ場合もあろう。また、誤記誤植の訂正はそれほど多くはないけれども引用文献の頁数にまで及んでおり、ありがたい資料となる。

いずれにしても、その所在だけは明らかにしておくべきであると考え紹介させていただいた次第である。

〈参考文献〉

有坂愛彦・慶谷壽信編 1989.『有坂秀世 言語学国語学 著述拾遺』,東京:三省堂.

吉池孝一 2007.「有坂秀世『音韻論』の諸版本」,『KOTONOHA』52,pp.15-19.



故濱田敦氏旧蔵本